

## 推論のパラドクスと証明論的意味論

大西琢朗 (日本学術振興会特別研究員 PD・首都大学東京)

証明論的意味論は、ダメット・ブラウイツ流の構成主義的な考え方のもとで展開されてきた。その一方で、彼らの理論的な枠組みに窮屈さを感じる論者も多く、いくつかのオルタナティブな枠組みも提案されている。ただ、そうしたオルタナティブ陣営による批判も、ダメットの元々の議論の細部まで踏み込んで展開されているわけではない。本発表は、ダメットの議論を詳細に検討し、彼の枠組みのどこが窮屈なのかを明確にする。そのうえで、それを解消するオルタナティブな枠組みを提示する。

本発表が取り上げるのは、いわゆる「推論のパラドクス」ないし「ミルのディレンマ」にかんするダメットの議論である。これは、演繹的推論の正当性 (説得力をもつこと) と有用性 (われわれの知識を拡張してくれること) は両立しない、という問題である。彼の議論は、J.S. ミルやフレーゲ以来のこの問題を「解決」することを目指すわけではない。むしろダメットは、問題を彼なりの仕方ですて直し、先鋭化させ、それを通じて、構成主義的な推論モデル、証明論的な「正当化」の考え方、そして意味論的な真理概念のあいだの複雑な関係を解き明かそうとするのである。

以上の議論を紹介したあと、本発表ではまず、ダメットの解明しようとした概念間の関係、とくに証明論的な正当化と真理概念の関係には不明確な点が残っていることを指摘する。次に、そうした不明確さは、ダメットが採用している構成主義的な推論モデルに起因すると診断する。この点で、彼の推論モデルは窮屈なのである。そして最後に、それに代えて、「検証 (証明)」の概念に加えて「反証」の概念も用いる、「双側面説 (bilateralism)」と呼ばれる推論のモデルを提案し、そのモデルのもとでは、ダメットの与えようとした説明が、よりスムーズに定式化できることを確認する。